

---

# 恋姫物語～神に恵まれし者～

暁

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋姫物語〜神に恵まれし者〜

### 【Nコード】

N3916Y

### 【作者名】

暁

### 【あらすじ】

何気ない日常を過ごして居た主人公が突然なにもない真っ白な空間に立っていた

そして神様から告げられた事とは……

作者は初心者です？

駄文になるかもしれませんがよろしくお願いします

与えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか（前書き）

初めて書きます。

至らぬ点もあると思いますがよろしく願います。

与えられし力は破滅を呼ぶか奇跡を呼ぶか

此処は何処だ……

周りを見渡すが辺り一面真っ白な空間ばかりだ

「ええ……と」

「たしか俺は部屋で寝ていはずたよな？」

よし行動を振り返ろう

まず高校から帰ってきて道場で稽古して飯食って少し運動して風呂に入って読書して普通に寝たよな

「うん……やっぱり訳がわからない」

しばらく考え込んでいると後ろに何か気配がしたので向いてみると

……

そこには土下座をしている真っ白な服を着た老人がいた……

「えつと……どちら様ですか？」

《本当にすみませんでした……》

「いや……いきなり謝られても困るんだが？」

《それもそうじゃな……とりあえず名乗ろうかの……儂は神様じゃ》

「はっ？」

《だから神様じゃと言っておろうが》

「何故に？そして此処はどこなんだ？」

《お主にやって貰いたい事があってのゝそして此処は天界じゃ》

「天界？なにそれ俺死んだの？」

《まあゝ確かにお主には死んで貰ったんじゃが…だから謝ったのじや》

「勝手に殺すなよ」

まあそうなったらしょうがないし  
アフターケアちゃんとしてくれよ」

《その辺は大丈夫じゃこちらから呼び立ててしもうたからの  
家族へのフォローはちゃんとするわい》

「それで俺に何して欲しいの？」

《実はのお主にはある外史の世界に行つてほしいのじゃ》

「外史つていくつもの世界が広がってるあれか？」

《そうじゃ、それにしてもお主よく知っておるのゝ》

「よく読書するからそんな感じの読んだことあるんだよね」

《そうか、なら話しが早いお主にはそこに行つてその外史を救つて欲しいのじゃ》

「分かつた、とりあえずどんな外史に行くんだ？」

《それはの………三国志の世界じゃ》

「えっ？危険真つ只中に行けと？」

《そこでじゃ、お主には僕の願いを聞いてもらつじやから三国世界に行つても生き抜けるよう能力を授けようと思つての》

「それなら良かったゝ行つていきなり死んだら洒落にならん…  
所でそる能力つてなんでもいいの？」

《まあ大抵の事なら構わぬよ、無理なものもあるのじゃが》

「マジ？それじゃあ

FaTeの全ての宝具でしょゝそれとBLEACHの斬魄刀全てと  
NARUTOの世界に出てくる忍術全てで写輪眼とかのリスク無し  
で後は刀語の完全系変体刀全てとオリジナル作成可能にして欲しい」

《かなりのチートっぷりじやの…》

「まあこれでも漫画好きですから一度はやって見たいし、外史を救うにはこれくらいしないと何かあつても困るし」

《それもそうじゃな》

「所でその三国志の世界はどんな感じなの？」

《うむ、それはじゃな……………有名武将が全て女性じゃ》

「えっ…マジすか？」

《マジじゃ、まあお主なら何とかなるじやろ》

「頑張ります！！それじゃ…しばらく此处で修業していいですかね？」

《それくらい構わぬよ、お主はまだ16才くらいじゃからの2年くらで良いかの？》

「うん、それくらいで良いかな。後流石に勉学は学びたいです」

《うむ、それくらい儂が教えよう》

「よろしくお願いします」

2年後……………

えっ早過ぎるって？

気にしないでください

（笑）

「ふう…これくらいでいいかな…何とか能力使いこなしてきたし、知識も体鍛えたし頑張れるかな」《お主はやはりチートじゃ……たった2年で全て扱える様になったのじゃからな。知識も天才の域を越えたしの…まあこれならあっちの世界に行っても大丈夫じやろ》

「それじゃ、そろそろ行きますか」

《うむ、それでは頼んだぞ》

そしてまばゆい光に包まれ意識が沈んでいった



## 主人公設定（前書き）

こんな感じでいいかな？

## 主人公設定

名前 アカウキナイ  
暁紅

容姿 るる剣の抜刀斎の頃の感じ

身長 170?

体重 55kg

性格 温厚かつお節介焼き

身体能力

FaTeの全ての宝具使用可能

BLEACHの全ての斬魄刀使用可能

NARUTOの全ての忍術使用可能

写輪眼とかのリスク無し

刀語の完全系変体刀全て使用可能

オリジナル作成可能

全ての武器は王の財宝>ゲート・オブ・バビロン<に収納している

自分の意識で手元に出すことが可能

忍術は印無しで発現可能

修業によってオリジナル忍術が使用可能

完全系変体刀も12本の他、創り出した刀もある

2年の修業によりF a T e N A R U T O B L E A C H 刀語の  
能力は全て可能になっている

随時出していきたいです

## 紅、大地に立つ（前書き）

やっと出来た…

なかなか文章は難しいです。

ひとまず紅の能力確認です。

では、どうぞ…

## 紅、大地に立つ

管輅によるある予言が三国に広がる

「天を切り裂いて、天より飛来する二筋の流星は天の御遣いを乗せ、乱世を沈静す。一人は神々しい出で立ちをした者、もう一人は武と知が備わった強者が現る」

今の乱世にはこれ程とない天よりの予言

民たちは何時か現れるであろう二人の御遣いを待ち望んでいるのだ

それから数日……

此処はとある人里離れた森そこには一人の青年が倒れていた  
そう…神様によってこの世界を救って欲しいと頼まれていた紅である。

「此処は………確か光に包まれたぐらいは覚えてるんだけど…辺りを見れば森だらけ………って事は三国の世界に着いたのかな」

「よし、取り合えず能力が発動するか確認するかな…来い『風死』………よし出来た。ついでに解号してみるか…刈れ『風死』………さて少し鍛練するか」

そう言って紅は『風死』を使い周りにある木々を切り倒していく…

「ふう〜こんなとこかな〜よし次は『火遁・頭刻苦』……………あ  
っ……………やり過ぎた……………消さなきゃ『水遁・爆水衝波』……  
…何とか消えたよ……………（辺りを見回し）考えて使わないと……………」

「さてお次は『約束された勝利の剣』…わっ…本当に見えないや〜  
…じゃあ『千刀・ツルギ』…限定奥義・千刀巡り！！……………わぁーお  
！？辺り一面刀だらけ……………取り合えず一通り出来るみたいだな。」

そして全て王の財宝に戻した

「さて、能力の確認出来たし…そろそろこの外史の有名武将でも見て  
廻るかな…取り合えず…魏の曹操、呉の孫策、蜀の劉備？まだ義  
勇軍かな〜後は洛陽の董卓か……………よし行こう！」

「あっ…その前に森を元に戻さないと…『木遁秘術・樹界降誕』……  
威力抑えめにしないとデカすぎるからな……………よし、これでよしと……………」

辺りは先程までと違って何も無かったかの様に元の森に戻った…

そしてそれを確認し紅は旅に出た……………

## 紅、大地に立つ（後書き）

やっと物語が始まるかな？

取り合えずそれぞれの武将にあってからにするかもです。

紅、無双し董卓軍に出会う（前書き）

やっと出来た……

無理くり詰め込みました…

戦闘描写がむずい…

駄文かもしれません…

チートします!!!!

フラグします!!!!

それではどうぞ…



## 紅、無双し董卓軍に出会う

「さて…どこから廻ろかな…取り合えず【反董卓連合】が組まれるはずだから董卓が暴君なのかどうか確認が必要だな、本当にそうなら倒さないといけないし、そうでなければ守らないと…」

「とにかく近くの村まで行ってみるかな…」

それからしばらくして……

「なんか知らんけど山賊ウザすぎね？」

歩いていく先々で襲ってくるし…たまに頭に黄色い布被った奴らも居たな…まあほとんど返り討ちにしたさ……と言ってもただ『千刀・ツルギ』で千刀巡りを発動させて斬って斬りまくっただけだし…十分チートだよ…んっ？なんか聞こえた気がするんするんだか…まあいいか……しまいにゃ…賊の一人に 剣鬼 って二つ名付けられたし……

お気に入りの『千刀・ツルギ』使ってりやそうなるか……」

それもそのはず紅は賊に会ったんびに『千刀・ツルギ』出して千刀巡りをしているから当たり前なのである…

紅がそう言って落ち込んでいると村が見えてきた…

「おっ…村があるな少し寄って情報収集でもするかな…」

そして村に入り…一人の村人と話す

「すみません。ちょっと聞きたいことがあるんだけど…いいかな？」

村人「んっ？……おお、旅のお方かい？」

よく来たな…それで聞きたい事とは？」

「ここ最近の噂かなんか聞かない？」

村人「噂か…：…そういえば陳留の方の曹操ってに何でも天の御遣い  
つてのが現れたらしいぞ…何でも神々しい姿らしい…」

「天の御遣いね…なんか胡散臭いな…：…しかも神々しいときたか…  
まあおいおい確認するか…」

所で洛陽の董卓ってどんな人物だい？」

村人「董卓様かい？あの娘は優しい子だよ…洛陽の民達はとても親  
しみを持っているらしいよ」

「そうなのか…近くだし一度会いに行ってみるかな…：…どうもありが  
とう…」

そして一息していると……

村人「賊が出たぞ…！！」

村人「黄色い布を巻いてる奴らいるぞ…！！」

それを聞いて…

「賊は何人くらいなんだ？」

村人「ありゃゝざつと見ても五万はいるぞ……旅のお方…早く逃げなさい……」

「取り合えず洛陽の董卓にこの事を伝えろ…誰か助けに来てもらえ…それまで時間稼ぎしてやるから」

村人「えっ？ たった一人でか…死ぬ気か？」

「そんな分けないよ。これでも結構強い方だね…」

村人「分かった……あまり無理するなよ……」

そして村の入口に立ち…

「うあゝ壮観だねゝ一面賊だらけだ…まあ時間稼ぎするとは言ったけど全部倒しても良いんだよな…」

「そうと決まれば今回は派手に『忍術』を打ち噛ますかなゝ殆ど刀だけだったし…たまにスッキリしないと…」

そして紅は賊達の前まで行く…

賊「なんだてめえは？」

「なんだと言われてもお前らを殺しに来たんだか？」

賊「はっ… たった一人でこの数相手に出来るってか？舐めてんじゃねえぞ！！」

「たった五万だろ？そんなの俺にとっちゃたいしたことないんだよな…」

賊「ならやれるもんならやってみやがれ！！」

「やれやれ… そんじゃ行きますか… 『風遁・真空連波』…」

紅の口から複数のカマイタチが吹き出される…

ズバツ…ズバツ…ズバツ…

賊達は次々と斬られていく…

ギァ…

賊「何が起きたんだ！！」

「ポケッとしてると死ぬぞ… 『火遁・霞炎舞の術』…」

今度は口から霧状の物質を吐き火を噴いて一気に火の海に変える

ポォー…

賊「ギァー…」

「まだまだ」『水遁・破奔流』…」

紅の掌に水の渦を作り広範囲に及ぶ巨大な水の竜巻を出現させるのを巻き上げていく…

ゴォー………

賊「妖術使いだ」…逃げろ」!!」

「妖術じゃないって…忍術だって……さてそろそろ終わらすか……水を浴びてるお前らは一瞬だ……『雷遁・偽暗』…」

両手から雷を高速で飛ばす…

ピカッ………ドゴォー………

一瞬眩しい閃光になり収まると五万もいた賊が殆ど生き絶えていたのだ…

「ふう」片付いた……後で埋めないとな…」

紅がそんな事を言っていると前方から【張】と【呂】と【陳】と【華】の旗が見えた…

「おっ…援軍が来たのかな?張遼に呂布と陳宮、華雄か…有名武将が四人も…しかも本当に女の子だよ…」

紅に近付いて来て

張遼「この村に賊が来おったて聞いたんやけど…なんや片付いとるな…あんたがやったんか？」

「そうだけど…」

陳宮「嘘をつくなです…たった一人で五万も倒せるなんて出来るはずないです…」

華雄「確かにそうだな…恋ならともかくお前見たいな奴が倒せるはずがない…」

「いや…そう言われても実際倒したんだが………」

呂布「……この人強い………」

陳宮「なんですと！？恋殿より強いはずないです…恋殿が一番強いに決まっています」

張遼「あの恋が言ってるんやからそうなんやろ？」

華雄「まあ…霞もそう言うならそうなんだろうな………」

「なああんた達がさつきから呼んでる名前は何なんだ？そっちの赤い髪の子は呂布だろ？それに袴着てるあんたは張遼だろ？」

張遼「なんやあんた真名知らんのかいな？」

「真名？聞いたことないな…今まで殆ど一人で旅をしていたしな…」

張遼「そうなんか…真名って言うのなあその人の本当の名前で親と

か自分が認めた奴以外その名を呼ぶと首斬られるんや」

「神聖な名前って事ね……気をつけないと……」

張遼「まあそう言うことじゃ……そういえばあんたの名前なんて言うん？」

「俺は紅だ……たまに 剣鬼 とも呼ばれてるな……」

四人「……！！」

「どうしたんだ？」

張遼「…… 剣鬼 ってあの 剣鬼 かいな？しかも真名まで……」

華雄「真名は神聖なものなのだが……しかもこんな奴があ の 剣鬼 とはな……」

陳宮「たしか賊共は 剣鬼 に出会ったら逃げると言っていたのです！」

「まあ、そう呼ばれてるみたいだな……」

確かに 剣鬼 とは俺のことだ……勝手に付けられたんだが……まあ紅つてのが真名になるのかな？気にしないよ」

呂布「……………恋」

「んっ？それって真名だろ？いいのか？」

呂布「……紅……いい人……それに強い……恋……闘ってみたい……」

「そっか俺も賊を三万人たった一人で倒したその力に興味あるしな……」

それじゃあよろしくな……恋」ニコッ

恋「（ポツ）／／／んっ……よろしく……／／／」

陳宮「／／／恋殿ずるいのです／／／ちんきゅーも紹介するのです／／／

姓は陳、名は宮、字は公台……真名は音々音なのです／／／音々と呼ぶといいのです／／／」

張遼「／／／ならうちもやな……」

姓は張、名は遼、字は文遠……真名は霞や……よろしゅうな／／／」

華雄「／／／私は姓は華、名は雄だ……字は無い……真名は訳があつて言えないのだ……済まない……／／／」

「なに気にするな、よろしくな……音々音、霞、華雄」

なんと紅にはニコポが備わっていた!!

「そうだ!恋達の主に会いたいだがいかな?」

霞「そやな……あの 剣鬼 が来たって聞いたら月っちびつくりするやろな」

華雄「ならば戻るとするか……我が主の元へ……」



「その前に倒した賊を片付けたいんだけどいいかな？」

音々「片付けるってどうするのです？」

「まあ見てなって…『土遁・土流割』…」

ドゴオーン

賊共の亡き骸が在った場所の大地が真つ二つに割れ地中へと飲み込まれていく……

四人「……………」

「ふう〜これでよしと……びつくりした？」

霞「何なん今の？いきなり大地が真つ二つに割れよったで？」

「今は『土遁』って言うんだ…土を操るからね…他にも色々あるよ…それをすべて『忍術』って呼んでるんだ」

華雄「『忍…術』…？ 妖術使いみたいなものか？」

「こつちで言う『仙術』かな？」

音々「おお〜凄いです!!」

恋「紅……カツコイイ……／／／」

「まつ…せっかく仲良くなれたんだし… 主の所に行ったら色々見せるよ」

霞「約束やでっついでにうちとも勝負な〜」

華雄「なら是非…私とも闘ってもらっ…」

恋「…ダメ……恋が…先…」

音々「音々は見学なのです!!」

「あゝわかった…それじゃあ行こうか」

そうして紅は董卓の元へと歩んで行くのである…………

紅、無双し董卓軍に出会う（後書き）

次は董卓に会いに行きます…

フラグ出るか！…！

チートするのか！…！

お楽しみに…

董卓に会い、紅は守ると誓う（前書き）

出来ました……

フラグ立ちます？

では、どうぞ……

## 董卓に会い、紅は守ると誓う

「此処が洛陽か…いい町だな」

霞「そやろ…なんと言つても、月やからな」

華雄「そうだぞ…董卓様は民達一人一人の事を大切にされているからな…」

音々「音々も月殿ために頑張っているのです!!」

恋「…月はいい子…恋が守る…」

「うん…董卓はいい家臣に恵まれているな」

紅はそう言いながら音々の頭を撫でてあげるのだった…

音々「!!…恥ずかしいのです…でもなんか気持ちいいのです…  
／／」

音々はうつとりしてしまった……

恋「…恋にもして……」

霞「うちにもして～な」

華雄「私は別に……だが……してもいいぞ……」

「わかった…わかった…しょうがないな」

そして三人を順番に頭を撫でる…

ナデナデ……………ナデナデ

恋「／／／…んっ…ポカポカする…／／／」

霞「／／／なんや…これ癖になるわ／／／」

華雄「／／／／／／／／／／」

「喜んで貰えて何よりだよ」さて…………そろそろ董卓に会いに行こうか…」

そう言つて紅は手を離す…

音々「もつと撫でて欲しいのです…………」

恋「紅…………もつと…」

霞「なゝもうちよつとえゝやんゝ」

華雄「もう少し撫でて貰えないだろうか／／／」

「また今度な…………」

霞「しゃゝない…ほな行こうか…」

そして城に向かう…

霞「さっ……着いたでっ」

「うはっ……っ……でっかいなっ」

華雄「なんだ初めて見るのか……」

「そりゃね…殆ど野宿か村ぐらいしか行ってないしな…」

音々「野宿なのですか!？」

「野宿と言つても、術を使って家作ってるしな…」

霞「ほえっ…なんか便利なんやなっ」

恋「……恋……見てみたい……」

「んっ…此処じゃ出来ないからなっ」

恋「（シユン）……残念……」

「今度見せるよ…」

恋「……わかった……約束……」

華雄「飯とかはどうしていたんだ？」

「ああ…それなら……（紅は空間から肉まんを取り出す）……って  
具合に食事には困らなかつたんだ…」

恋以外「……………!!」

恋「……肉まん……おいしそう……（ジユル）」

霞「今……どっから取り出したん……？」

華雄「一体……どこから……？」

音々「それも忍……術と言うものなのですか？」

「おいおい……説明するよ……恋……食べるか……？」

恋「（コクコク）」

ハムハム……ゴキユン……

「（なにこの可愛い生き物……）……恋もつと食べるか？」

そう言つて紅は10個くらい肉まんを空間から取り出した……

恋「（コクコクコクコク）」

ハムハム……ハムハム……ハムハム………ゴキユン……

霞「恋は相変わらずの食つぷりやな」

華雄「見ているこつちがお腹一杯になりそうだ……」

音々「恋殿……」



「後で一杯あげるから…そろそろな？」

恋「……………んっ」

そして謁見の間の扉前……

霞「それじゃ…紅は此処で待ってな」

華雄「村の賊の報告とかの後で紹介するのにな…」

「わかったよ…待ってる」

霞「月……詠……戻ったで」

華雄「董卓様ただ今戻りました…」

恋「ただいま……………」

音々「ただいまなのです」

賈馱「！！……………あんた達…大丈夫だったの！？」

董卓「へう……心配してました…」

霞「ああ〜それな……こちらが着いた時にはもう片付いとったんや……」

賈馱「嘘！？……だって五万も居たのよ！！」

華雄「嘘ではない…本当だ……私達が着いた時にはたった一人の青年によって壊滅されていたのだ……」

董卓「一人って本当なんですか？」

霞「そやで〜会ってみるか？二人ともびっくりするで？」

賈馱「えっ！！来てるの？」

華雄「ああ……話し込んでいるうちに董卓様に会って見たいと言ってたのでな」

董卓「私に……ですか…」

霞「紅〜入っていいで〜」

そして扉が開き……

「お邪魔しま〜す」

賈馱「ちよつとあんた！！五万の賊を一人で倒したって本当なの？」

「おお〜いきなりだな……たしかに…一人で倒したぞ……所であん

たは？」

賈馱「嘘はついてなさそうね……私は賈馱……字は文和」

「あんたが賈馱か……って事は隣の子が……」

董卓「私が董卓です……字は仲穎と言います」

「（この子があの暴君！？そうは見えないな……）そうか……君が董卓か……俺は紅だ……賊からは 剣鬼 って呼ばれてる……」

二人「……！！」

賈馱「 剣鬼 って言えば会ったら最後……生きては帰れないって言う……」

董卓「 剣鬼 って言うから怖い人かと思っていました……」

「まあ……襲われたりしたら返り討ちしてたらそうなった……」

賈馱「それなら納得するわ……一人で倒せるわね……」

董卓「村を守ってくれてありがとうございます」

「なに……礼を言われることじゃないさ……俺が助けたいと思ったただけだ……」

董卓「それでもです……ありがとうございます」

賈馱「そうよ……私からも言うわ……ありがとうございます」

「（たしかに慕われるな…守ってあげたい…）」

董卓「よかつたら真名を受けとって貰えますか？」

賈馱「そうね…あんたなら真名を預けてもいいかも」

「おいおい…いいのか…真名は神聖なんだろう？」

霞「月が言ってるやから…受けとったり〜な」

音々「そうなのです！詠殿も預けると言うことは認められているのです…！」

「わかった…有り難く受け取るよ」

董卓「私は月と言います」

賈馱「私は詠よ」

「こちらこそよろしくな…月、詠…俺の事は紅でいいよ」「ニコッ

二人「／／／／／！！」

霞「あゝ二人ともやられたな…／／／」

華雄「そうみたいだな／／／」

音々「あの笑顔はドキッとするのです／／／」

恋「……紅……／／／」

「それじゃ／＼しばらく客将として置いてくれないか？」

月「へう／＼よろしくお願いします／／／」

詠「わ…私からもお願いするわ／／／」

紅はしばらく客将とるのである…

董卓に会い、紅は守ると誓う（後書き）

次は約束していた恋達との模擬戦にしたいと思います…

戦闘描写難しかもしれませんが…

オリジナル武将もだそうかなって思ってます。

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる

【前編】（前書き）

書いてたら文字数足りなくなったので分けます…

オリキャラ登場します

ではどうぞ…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる

【前編】

「さて…恋、霞、華雄…模擬戦しようか…」

恋「んっ……わかった……」

霞「おっ…待ってました…」

華雄「ふむ、楽しみだな…」

音々「音々は見学するのです」

詠「ちよつと…あんた達…城を壊す気なの…!」

「ああゝ大丈夫、大丈夫…俺なら直せるから」

詠「直せるってどうやって？」

「まあ見てたらわかるよ」

月「詠ちゃん…とにかく見に行ってみよ」

詠「月…もう…わかったわよ…」

そして演習場に向かう…

「さて…誰からにする？」



華雄「私から行かせてもらおうか……」

華雄は金剛爆斧を持ちながら構える……

「最初は華雄か…（カタイプっぽいな）じゃあ…来い『絶刀・鉋』  
…」

一本の刀が現れる…

華雄「それも紅の力なのか？」

「ああ…俺には『王の財宝』ってのがあってそこに幾つ物武器がしまつてあるんだ…まあ殆ど見えない空間にあるからね…それに食料も保存出来るよ、腐らないから便利なんだ…」

霞「だからあんな沢山…肉まん出てきたんか」

恋「紅…肉まん…食べたい…（ジユル）」

「あゝ恋…模擬戦の後沢山食べさせてあげるから」

恋「わかった…」

「よし…それじゃあ…始めようか…」

霞「ほないくで…両者…構えっ…始め!!」

華雄「うおおおおっ」

華雄は物凄い勢いで金剛爆斧を振りかぶり一気に振り下ろす…

ガキン……

「さすが華雄だね……凄い力だ……」

紅は『絶刀・鉋』でそれを防ぐ……

華雄「なに……！……たかが細い刀で私の一撃を防いだだと……」

「この『絶刀・鉋』は頑丈さに主眼を置いててね……決して折れも曲がりもしない……次はこちらから行く……！」

紅は斬撃と突きで華雄を翻弄していく……

詠「凄い……あの華雄が一方的に押されてるなんて……」

霞「ほんまやで……あの斬撃と突きの速さ尋常じゃないで……」

恋「紅……やっぱり強い……楽しみ……」

音々「恋殿が喜んでるのです……！」

ザンツ……ザンツ……シュツ……シュツ……

ガキン……ガキン……ガッ……ガッ……

華雄「くっ……防御するだけで手一杯だ……！！」

「さて……そろそろ終わりにするかな……行くぞ……！！限定奥義「報復絶

刀「……」

紅は荒い突きを仕掛ける……

シュ……シュ……シュ……シュ……シュ……シュ……

ガキーン……

華雄「しまった……！！」

華雄の斧が手から離れ無防備になり、紅は空中へ大跳躍し……

トンッ……

袈裟掛け斬りを仕掛ける……

「てえりやあああああッ」

ドゴオ~~~~ン……

当たり一面に砂埃が舞う……

霞「ケホッケホッ……どうなったんや……」

砂埃が晴れそこにあつたものは……

華雄の鎖骨辺りで刀を寸止めしている紅の姿があつた……

華雄「……さすがだな……」

「いやいや…華雄もたいしたもんだよ…俺のあれだけの突きに対処出来てるんだしこれからも伸びるよ…」

華雄「そうか…ありがと……………」

華雄は気が抜けたのか紅の方に倒れ込んだ……

「おっと…………お疲れさん」

霞「勝者…………紅!…」

《うおおおおお》

いつの間にかギャラリーが増えていた…

「うおっ…びつくりした…いつの間に集まったんだ?さて…華雄を休ませないと…………」

そう言つて紅は華雄をお姫様抱っこするのである……

霞「あゝずるいで……うちにもして…!!」

恋「ずるい…………恋も…………」

音々「ずるいですぞ…………ねねにもするのです!」

詠「なっ!!何してんのあんたは!!／／／」

月「へうう／／／／」

「いや……何をつて…華雄を休ませないと……」

近くの芝生へと寝かせる……

「さて…次は霞かな……」

霞「よっしゃ！！うちもお姫様抱っこしてもらっで！！」

「いや…負ける前提をされても困るんだが…まあ…その時はするよ」

一呼吸置き……

「さて…やろうか…」

霞「神速の張遼の腕前見せたるで」

「（霞はスピードタイプか…）…来い『神槍』…さらに解号…射殺せ『神槍』…」

一本の脇差しが現れる…

霞「なんや…短い刀やな…そんなんでうちに勝てると思ってるん？」

「まあ…見てなって…詠…頼む…」

詠「わかったわ…両者構え……始め！！」

霞「先手必勝やつ！！」

霞は飛龍偃月刀を物凄い速さで斬撃を放つ……

ザンッ…ザンッ…ザンッ…ザンッ…

しかし紅は紙一重でほぼ回避する…

「さすが…神速なだけあるな…すごいや」

霞「それを余裕でかわしてる紅の方がすごいんやけど…なんか落ち込むで…」

「いやいや…十分過ぎるほど速いよ…俺が特殊なだけだよ」

霞「でも…紅に褒められるんは嬉しいわ／＼／」

「どういたしまして…それじゃ…俺も行くよ!」

紅は『神槍』を胸の前で構える…

「……………舞踏……………」

ビュンッ……………

霞「なっ!?!……………でも…こんくらい!?!」

霞はいきなり伸びてきた『神槍』に驚いたが瞬時にかわす…

「流石だね…これならどうかな……………舞踏連刃……………」

ビュン…ビュン…ビュン…ビュン…ビュンッ

休む間もなく『神槍』が伸びてくる…

霞「くっ……一瞬でも気抜いたら……やられてまう……」

「流石…神速の張遼なだけはあるよ…かすりもしないんだもん……」

霞「ハアツ…ハアツ…ハアツ…これでも…結構…きついんやけど…

…」

「霞にこれじゃ勝てないか…来い『斬刀・鈍』…」

紅は『神槍』を消しすべてが真っ黒な刀を出した…

霞「紅はほんとおもろいやっちゃ…武器が色々出て…」

「でもこれで終わりだよ…一瞬で……零閃……」

シャリンッ……

霞の間に一瞬で入り峰で居合いする…

霞「うっ……」

ドサッ……

月「霞さん!？」

音々「霞殿!？」

「大丈夫だよ…峰打ちだから」

詠「……勝者……紅!」

《うおおおおっ》

《すげえええっ》

「さて…約束通り運びますか…」

紅は霞をお姫様抱っこで運ぶ…

その途中……

霞「んっ……」

「おっ…目を覚ましたかい？」

霞「紅に運ばれてるって事は負けたんやな…やっぱ…凄いわ…」

「霞も鍛えれば大丈夫だよ」

「そっか…なかなかええもんやね…これ…／／／」

「喜んで貰えて何より…」

そして華雄の隣に降ろす…

霞「あんがとさん／／／」

華雄「んっ……ここは……」



霞「おっ…華雄…目…覚めたんか？」

華雄「ああ…確か…負けた所までは覚えているのだから……」

霞「あの後、倒れて紅にお姫様だっこされたんやで？うらやましかつたで？まあ…うちも負けて運んでもろうたけど／＼／」

華雄「なっ／＼／（覚えてないのが悔しい！！）」

「華雄も霞もゆっくりしてなよ…最後の試合するからさ…」

華雄「わかった…次の一戦は見物だからな…紅…後で話があるんだがいいか？」

「ああ…構わないよ」

霞「（華雄もとうとう言うんか…）うちも恋との試合が一番楽しみにしてたんや」

「じゃあ…ご期待に応えないとね…」

紅は恋の居る方へ歩いて行く……

恋「紅……早く……」

音々「恋殿…頑張ってくださいね」

「さて…恋を相手には最初から全開で行かないとな……」

恋「恋も…本気で行く……」

両者から物凄い闘気が溢れ出る……

ゴォ~~~~~ッ

華雄「……………ッ…これが二人の本気なのか……」

霞「……………ッ…もの凄い闘気や……」

音々「恋殿…楽しそうなのです!!」

月「へう~~~~」

詠「……………ッ…ちょっと!!あんた達周りを考えなさいよ!!」

そして二人の前にある武将が立つ…

?「あぶないでござるな」

?「まったくだ二人にはきついぞ」

「あつ…ごめんごめん…恋と戦えると思うと……………ね!?!」

紅は月と詠の前に立っている武将を見て驚く…

そこには長身で腰まであろう緑色の髪をポニーテールにしている糸目の女性と長身で褐色肌の黒髪にこれまた腰まで伸びている女性が

居た…

「（なんで…ネギ魔キャラが居るの！？…俺が介入してるからか？）  
…所で君達は？」

？「某は高順でござるよ…字は無いでござる」

？「私は徐晃…字は公明だよ」

気を取り直して…

「高順に徐晃か…君達も強そうだ…」

高順「やめとくでござるよ…」

徐晃「私もだ…勝てる気がしないよ…」

「そつか…残念…でもたまに鍛練の相手してね」ニッコ

高順「／／／」

徐晃「／／／これはまた…／／／」

「さて…恋…始めようか…」

恋「うん……」

詠「じゃあいくわよ…両者構え…始め！…」

恋は方天画戟を振り抜く…

ゴォ~~~~ツと風が吹き荒れる…

紅はそれを避ける…

「さすが天下無敵の呂布だな…（恋は万能タイプか…）…じゃあ…  
次はこっちから…『斬月』…」

紅は『斬月』で物凄い速さの斬撃を繰り出す…

ザンツ…ザンツ…ザンツ…ザンツ…ザンツ…

恋はそれを軽々と避ける…

恋「紅も…強い…恋…楽しい…」

そう言って方天画戟を次々と振り抜く…

ブオン…ブオン…ブオン…ブオン…ブオン…ブオン…

紅も軽々と避ける…

周りがボロボロになっていく…

「これ以上は城が壊れるから一気に決めようか？」

恋「うん…行く…！」

「…正解『天鎖斬月』…」

そして二人は交差する…

ドサッ…

そこに立っていたのは紅だった…

詠「……………ハッ！…勝者…紅」

《うおおおおっ》

《呂布に勝ったぞ》

「恋…大丈夫か？」

恋「大丈夫…紅…楽しかった…運んで／／／」

「俺も楽しかったよ」

紅はそう言っただけ恋をお姫様抱っこで華雄と霞の側に運んで降ろす…

辺りを見回し…

「さて…直しますか…」

詠「直すって…どうするのよ…」

「まあ見てなって……『土遁・地動核』……」

ボコッ…ボコッ…ボコッ

すると先程までボロボロだった演習場が元に戻る…

詠「あんたは一体…」

月「もしかして紅さんは…天の御遣い様ですか？」

全員「……………!!」

続く……

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる

【前編】（後書き）

次で董卓編を終わらして次の場所に行こうかと考えてます…

紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】（前書き）

何とか出来ました…

それでは…どうぞ…



## 紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】

「天の御遣いって一人じゃないの？陳留に現れたって聞いたことあるんだけど…」

月「天の御遣いは二人いるんです…一人は神々しい姿をした者…もう一人は武と知を備えた強者…」

「ってことは…その武と知を備えた強者が俺だと…」

華雄「それなら納得だな」

霞「そやね…うちに勝つんやから」

恋「紅…恋より…強い…」

音々「紅は天の御遣いなのです」

詠「あの三人に勝つんだから納得よね…」

高順「天の御遣いでござるか」

徐晃「納得せざるおえないね」

「皆が言うならそうかもね…月を守るなら…うってつけの肩書だ…」

詠「月を守るって…あんた…なんか起きるって知ってるの…！」

「そうだな…皆には話しておこうか…まずは城に戻ろう…」

そして謁見の間……

「さて……詠は【反董卓連合】と聞いてどう思っ？」

全員「……………!!」

詠「……月に何か起きるのね……」

「ああ……まず今起きてる黄色い布を着けた奴ら……黄巾党の件が片付いたら霊帝は崩御する……その後、十常侍にいいように利用され洛陽に圧政を引き悪い噂を立てられ袁紹と袁術の名声の為……討伐される……」

月「そ………そんな……」

詠「霊帝が崩御するだけじゃなく……月にそんな事が起きるなんて………」

霞「紅……何とかならへんのか？」

華雄「そくだ……月様を守る方法は無いのか？」

恋「月はいい子……恋……絶対守る」

音々「そうですぞ!!」

高順「そうでござるな……なんとかならんでござるか？」

徐晃「そうだね…守れるなら守りたい…」

「俺はそれを防ぐために此処に来たかったんだ…最初は知っている通りの人物なら始末する気だった…」

全員「えっ……!!」

「安心して…月に会ったらそんなこと思わなくなったから」

全員がホッとする…

霞「勘弁して欲しいわ…勝てへんも…」

華雄「そうだな…霞と恋の三人掛かりでも無理だろうな…」

恋「紅と戦いたくない…」

「そこでだ…皆を死なせたくないからある程度…洛陽を良い政策をして豊かにする…そして皆を鍛える…」

月「どうして…そこまでしてくれんですか…?」

「どうしてって…守りたい事に理由なんていらなからさ…俺が守りたいそれで十分だよ…」ニコッ

全員「///!!」

月「へうへう…ありがとうございます///」

詠「ボクからもお礼を言っわ…ありがとう／／」

霞「その笑顔は反則や…／／」

恋「紅……／／（ポツ）」

音々「そうなのです／／」

高順「反則でござるよ／／」

徐晃「反則だねえ／／」

「そうだ！華雄…なんか話あるんじゃないか？」

華雄「……ハッ！／／…そうだった／／実は紅に真名を預けようと思ってな／／」

「えっ！！なんか言えない訳があつたんじゃないのか？」

華雄「実は…私は真名を伝える相手は伴侶になる相手と決めていたのだ／／」

「今…なんと…？」

華雄「だから…伴侶になる相手と…何度も言わせないでくれ／／」

「……そうなのか／／」

華雄「預かってくれるか…／／／？」

「わかった… 剣鬼 と言われているこんな俺でも良かったら／／／」

華雄「ありがとう…／／／私の真名は椿だ…／／／」

霞「やっぱり好きやったんか…うちも紅の事好きなんよ／／／」

恋「恋も…紅…好き／／／」

音々「ねねも好きですぞ／／／」

月「へう／／私も好きになってしまいました／／／」

詠「月も！？……ボクも好きになっちゃった／／／」

高順「某も惚れてしまったでござるよ／／／真名は楓でござる／／／」

徐晃「私もだ…／／／一目惚れつてのはあるもんだね…／／／真名は百合だ／／／」

「みんな…ありがとう／／／」

そして数週間経っていく…

その間…紅は賊の退治や政務、武将達の鍛練をして、洛陽の民達との交流を深めていった…

その結果…

紅には新しい二つ名が出来た… 天の術神 … 五大忍術を使ったりしたから当然である… 賊に雷遁を使い「天の裁きだ」とか… 土遁や水遁、火遁、木遁など使い「神の怒りだ」と言われたからである…

武将達は恋に匹敵する程までいかなくても強くなり… 軍師組もかなり鍛えられた… さらに紅との間も深まった…

民達からは毎日と言っていていい程… 料理や贈り物など貰った… その度に 王の財宝 にしまつのである…

子供達からの遊びにも付き合ったりした…

そして…

「皆に伝えたい事がある… そろそろ旅を再開しようと思う…」

全員「えっ!!」

「ちゃんとした理由があるんだ… もしもの為に月達の匿える場所を探そうと思つてね… それで他の場所に居る有名な武将を見に行こうと考えて…」

詠「それって誰なの…?」

「とりあえず気になるのが呉の孫策と… 後は幽洲の公孫賛の所に居る義勇軍の劉備かな… 陳留の曹操は天の御遣いが居るけど… どんな

もんか確認しに行くかも…」

月「わかりました…でも…気をつけて下さいね」

「大丈夫…ちゃんと会いに来るよ…一応此処の場所に術式掛けておいたから…何時でも来れるよ!」

霞「忍術やな!!」

椿「それなら寂しい想いをしなくて済むな…」

恋「恋…待ってる…」

音々「ねねも恋殿と待ってるのです!!」

楓「某も寂しいのは勘弁でござるからな…」

百合「ああ…待つのは辛いからね…」

詠「ボクも月と一緒に待ってるから…」

「俺は幸せ者だね…こんなに沢山の嫁さんが居るんだから／／／」

全員「／／／／／」

「それじゃあ…行くよ…詠…十常侍には気をつけてな…」

詠「わかった…気をつけなさいよ…皆…あんたの事…心配なんだから／／／」

「わかった…ありがとう／＼」

そう言って紅は皆に接吻をするのであった…

そして…城を出る…

「さて…とりあえず…劉備の所に行ってみるか…『忍法・超獣偽画』…」

紅は墨の鳥に乗り劉備の元へと向かう…



紅、武を見せつつしかも洛陽の民に慕われる【後編】（後書き）

次は劉備の所です…

頑張ります!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3916y/>

---

恋姫物語～神に恵まれし者～

2011年11月19日22時58分発行